平成　21年　3月　31日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2008
課題番号：19720045
研究課題名（和文）　和歌作品の調査、収集を通した鎌倉時代西園寺家像の再構築

研究課題名（英文）

研究代表者
藤川　功和（FUZIKAWA　YOSHIKAZU）

研究者番号：８０４０３５２５

研究成果の概要：
従来殆ど注目されることの無かった、鎌倉時代西園寺家の歴代当主の和歌活動と政治的活動との連動の様態について、和歌作品の収集、注釈を通して、その実態に迫った。
具体的には、西園寺家当主である実氏（さねうじ）の参加した『院御歌合』の注釈作業を通じて、実氏が自身の政治活動に和歌をどのように利用したのか、その実態に迫った他、西園寺家とライバル関係にあった九条基家の和歌について、『弘長百首』を例に考察し、権門歌人の和歌活動と政治活動との相関関係について、立体的な把握を目指した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1400,000	180,000	1580,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：日本文学
キーワード：歌合　実氏　注釈　院御歌合

１．研究開始当初の背景
西園寺家は、鎌倉時代の〈政治〉と〈文学〉を研究する上で、欠くことの出来ない存在である。
そもそも、西園寺家は、藤原氏北家閑院流公実男の通季（１０９０～１１２８）を始祖とする。家格は、清華だが、通季の曾孫公経（１１７１～１２４４）は、文治末から建久初年頃、鎌倉幕府初代将軍源頼朝（１１４７～１１９９）の妹婿一条能保女全子を娶り、頼朝と姻戚関係を結ぶ。以後、関東申次として、幕府との連絡役を務めるなど、幕府方との関係を深める。承久の乱に際しては、後鳥羽院によって長子実氏（１１９４～１２６９）とともに拘禁されるが、家司を遣わして、鎌倉に異変を知らせている。乱後、公経は、承久三年閏十月に内大臣、翌貞応元年には太政大臣に任じられ、清華家としての極官に昇

り、また翌年には従一位に叙される。

一方で、公経は四条天皇急逝を受けて鎌倉幕府によって擁立された後嵯峨天皇（１２２０～１２７２）に実氏女姞子（１２２５～１２９２、後の大宮院）を入内させる。姞子は、寛元元年（１２４３）六月に久仁親王（後深草天皇）を、建長元年（１２４９）五月には恒仁親王（亀山天皇）を生んだ。寛元四年（１２４６）正月には後嵯峨天皇が当時四歳の後深草天皇に譲位、実氏は今上帝の外戚となり、同年三月には太政大臣に任じられる。同十二月には、九条道家に代わって関東申次となる。また、康元二年（１２５７）正月には、実氏女公子（１２３２～１３０４、後の東二条院）が、後深草天皇の中宮となり、実氏は二代の国父となる。さらに、正元元年（１２５９）後深草天皇譲位をうけ即位した亀山天皇の外戚ともなっており、西園寺家はここに全盛を極めるのである。

西園寺家は以後も、関東申次を代々継承するとともに、持明院、大覚寺両皇統にそれぞれ女子を入れて外戚となり、摂関家をしのぐ権勢を、鎌倉時代の終焉まで維持することとなる。

つまり、西園寺家は、家祖公経が、承久の乱（１２２１）後、鎌倉幕府と朝廷との実質的な連絡役〔関東申次〕となって以降、歴代当主が代々その任を受け継ぎ、また、公経嫡子実氏は、娘姞子を後宮に入れ、後深草・亀山両天皇の外祖父となる等、朝廷と武家双方の中枢に位置していたのである。

また、当時和歌がその主流をなしていた文学の面で、公経は、藤原定家撰『百人一首』に採られ、『新古今和歌集』以後の勅撰集にも多く入集した鎌倉時代を代表する歌人であり、以後の歴代当主も代々の勅撰集に入集する等、和歌をよくした。

しかしながら、従来、西園寺家と和歌をはじめとする文学との関わりに関しては、四代実兼（さねかぬ）については、多くの研究がなされてきたものの、他の当主の文学活動に関しては、これまで殆ど顧みられることがなかった。

２．研究の目的

西園寺家の文学活動の中心をなす和歌活動は、単なる文芸活動ではなく、一つには、自家の政治的位置を天皇や院にアピールする手段として機能していたのであり、西園寺家の和歌活動を研究することは、和歌文学史の隙間を埋めるのみに留まらない。すなわち、今まで歴史学が史料として殆ど用いてこなかった和歌関係の資料を精査することによって、西園寺家が和歌を政治的にどのように利用して、朝廷、鎌倉幕府双方との関係を構築していったのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

主に二つからなる。一つは、歴代当主の残した和歌作品を出来うる限り収集すること。またもう一つはその中から代表的な作品を取り上げて、諸本による本文異同を確認した後、確定した本文を用いて、語釈・通釈を施し、それらの作品が生み出された背景を探った。

具体的には、後嵯峨院政初発期に催された『院御歌合』を対象として、諸本の比較検討、語釈、通釈作業を施し、出詠歌それぞれの内実を検討し、特に実氏の和歌については、彼が詠歌に込めた政治的主張を測定した。

また、『院御歌合』の後年に成立した、『弘長百首』を材料として、その百首歌に出詠した西園寺家とライバル関係にあった九条基家詠について、その内実を検討し、彼の政治的主張と和歌の利用の仕方を検討し、その利用方法を、西園寺実氏のそれと比較すること

で、西園寺家の政治と和歌の相関関係について、より立体的な把握を行った。

４．研究成果

西園寺家の中興の祖である実氏の参加した『院御歌合』の出詠歌の殆どについて、注釈作業を行うことが出来た。また、それらの成果を踏まえた上で、『院御歌合』全体の分析も行い、鎌倉時代中期の西園寺家が和歌を政治活動にどのように組み込んでいたのか、その実態を明らかにすることが出来た。

具体的には、実氏の場合、『院御歌合』二題目「山花」から六題目「野外雪」までで、あたかも齢を重ねた自身を写し取るような（或いはそのような解釈も許されるような）詠を繰り返していた。そして、最終「社頭祝」題詠では、後嵯峨院ゆかりの石清水社を詠み込み、御代を言祝ぐ嬉しさと共に、栄花を極めた我が身の喜びを高らかに謳っていた。

つまり、当該歌合の実氏詠は、〈これから繁栄するに違いない後嵯峨院政において、今上帝の外戚、また関東申次や評定衆でもある自分が、齢を重ねていよいよ重きをなす存在である〉と、歌合の主催者後嵯峨院や他の歌人達に主張しているように読みとれるのである。実氏にとって当該歌合における一番の狙いは、院政初発期に際して自身の政治姿勢や政治的位置を喧伝することにあったと結論づけた。また、冒頭の「早春霞」題で、主体を敢えて朧化した構造で「たちや出でまし」と詠じた意図は、「霞をこめて」に後嵯峨院政の約束された繁栄を託すと同時に、後嵯峨院政の表舞台へ自らが「たちや出でまし」と暗に主張していると考えたのである。そして、そのように捉えた上で、実氏の『院御歌合』出詠歌十首を見渡すと、冒頭詠と最終詠とが、いずれも後嵯峨院政への祝言と実氏の主張とが同時に詠み込まれている点で通底しており、首尾が対の構造となっていることが明らかとなった。すなわち、実氏は、先に確認した老残詠の繰り返しも含めて、自身の政治的主張を、十首のどこに配置しどのように反映させるのかにかなりの意を払い、いわば戦略的に歌作に及んだものと指摘しうるのである。

但し、実氏息公相の場合、主な百首詠、歌合出詠歌を見る限り、父実氏に比べるとあまり露骨に自身の政治的主張を詠み込む傾向はみえなかった。公相は、実氏に先立ち四十五歳で亡くなっており、政治家として重みを増していく前に生涯を閉じたことも、或いは関係しているのかもしれない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７件）

①藤川功和・位藤邦生・田野慎二・山崎真克「宝治元年『院御歌合』注釈―「旅宿嵐」題―」（『尾道大学日本文学論叢』第４号、未定、２００９年７月刊行予定、有）

②藤川功和・位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・赤迫照子「宝治元年『院御歌合』注釈―「野外雪」題―」（『尾道大学芸術文化学部紀要』第８号、３―１９、２００９年３月、　無　）

③藤川功和・位藤邦生「宝治元年『院御歌合』注釈―「忍久恋」題―」（長崎大学教育学部紀要　人文科学』第 75 号、１１－２７、２００９年３月、無）

④藤川功和・位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・赤迫照子「宝治元年『院御歌合』注釈―「逢不遇恋」題―」（『表現技術研究』第５号、３７－５９、２００９年３月、有）

⑤藤川功和「『弘長百首』攷―九条基家詠を起点として―」（『国語と国文学』第 86 巻第２号、２９－４３、２００９年２月、有）

⑥藤川功和・位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・赤迫照子「宝治元年『院御歌合』注釈―「初秋風」題―」（『尾道大学芸術文化学部紀要』第７号、３―２１、２００８年３月、無）

⑦藤川功和・位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・赤迫照子「宝治元年『院御歌合』注釈―「海辺月」題―」（『表現技術研究』第４号、１―２３、２００８年３月、有）

〔学会発表〕（計２　件）

①「『弘長百首』一面―九条基家詠を中心に―」
（尾道大学日本文学会　２００７年１２月８日　於尾道大学Ｃ棟C4教室）

②「『弘長百首』の九条基家」
（広島大学国語国文学会　２００７年１１月２４日　於広島大学学士会館）

６．研究組織

(1)研究代表者

藤川　功和（FUZIKAWA　YOSHIKAZU）

研究者番号：８０４０３５２５

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：